九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

estar+gerundioの記述と考察(下)

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/1495232

出版情報：独仏文學研究. 50, pp.7-28, 2000-05-11. 九州大学独仏文学研究会
バージョン：
権利関係：

estar＋gerundio の記述と考察(下)*

山　村　ひろみ

2.考　　察

第１節では estar＋gerundio の実態が，①どのような事態を対象にするか，②どのような時制によって表出されるか，③どのような時間的副詞句と共起するか，という三点から明らかにされた。本節は，その結果をもとに，同形式の本質的機能を解明していくことを目指す。

2.1.estar＋gerundio の本質的機能の仮説

estar＋gerundio（以下，estar＋ger.と略記）の本質的機能を考察するにあたり，本稿はまず何らかの仮説を立てることにした。その際の論拠としたのは，estar＋ger.とそれによって表出される事態の関係である。第１節において明らかになったことのひとつに，estar＋ger.が対象とする事態はもっぱら atelic であること，なかでも，同形式は activity 類事態においてもっとも頻繁に出現するという事実があったが，このことから本稿は，対応する単純形と estar＋ger.との意味的差異がもっとも鮮明に出るのは activity 類事態においてであると考えることにした。その activity 類事態の時間構造を今一度確認しておくと次のようになる。

activity 類：proposición（Prop.）[José correr rápido]（ホセが早く走ること）
　　José corrió rápido. ホセは早く走った。
　　＝O（～Prop. & Prop.）
　　＝O（～[José correr rápido] & [José correr rápido]）
　　→ evento（e）
　　José corría rápido. ホセは早く走っていた。
　　＝PoV
　　＝P（既定の過去時）（José corre rápido）
　　＝P（既定の過去時）（$e^1+e^2+e^3+\ldots e^n$）

上は，典型的な activity 類事態である [José correr rápido]（ホセが早く走ること）という事態を例として，それが pretérito と imperfecto で表出された場合の相互関係を表わしたものである。これによれば，その pretérito による表出は当該事態の未成立から成立への変化，つまり，その事態の成立そのものを示すのに対し，その imperfecto による表出は既定の過去時において当該事態の成立が連続的・累積的に行われることを示すことが分かる。今，pretérito の示す当該事態の成立を evento（＝e）とするならば，activity 類事態の imperfecto による表出は，（$e^1+e^2+e^3+\ldots$

*本稿は『言語文化論究』No.11に「estar＋gerundio の記述と考察（上）」という題目で発表した論文の続稿である。

e^n）という記号が示すような，まさにその evento の連続・累積を示すことになるわけである。しかしながら，imperfecto（あるいは imperfecto と同じく不完了アスペクトを持つとされる時制）によって表出された activity 類事態には，このようなある基準時における当該事態の連続的・累積的成立の表示という機能のほかにもうひとつ重要な機能がある。それは，以下の例に見られるような，当該事態を主語の習慣，主語の属性として表出する機能である。

(46) De joven, José corría rápido. 若いころ，ホセは足が早かった。
(47) No está/estaba mintiendo. Él no miente/mentía nunca ni tiene/tenía por qué hacerlo. (Solé & Solé 1977：47)
彼は嘘をついていない/いなかった。彼は決して嘘をつかないし/つかなかったし，つく理由もない/なかった。

(46) は，先に見た例と同じく，[José correr rápido] という事態が imperfecto によって表出されたものだが，de joven（若いころ）という副詞句と共起することにより，既定の過去時において進行中の事態という解釈ではなく，新たに，主語である José という人物のその過去時における属性という解釈が付与されている。また，(47)は，Solé & Solé(1977：77)が presente や imperfecto といった単純形とそれに対応する estar＋ger.との違いを際立たせるために引用した例で，彼らの解釈によれば，単純形と estar＋ger.が並置されると，前者は当該事態が主語の習慣，属性であることを，また，後者はそれが当該時点において進行中の事態であることを明示することになるという。

さて，以上のような activity 類事態の単純形が示す異なる意味内容およびそれに対応する estar＋ger.のあり方を踏まえながら，本稿は，取りあえず，activity 類事態の estar＋ger.による表出は，その単純形が示す二つの意味内容，すなわち，「当該事態の連続的・累積的成立」と「主語の属性」とを区別するためのもの，特に，その連続的・累積的成立，連続的 evento 性を明示するための手段であると仮定することにした[1]。

仮説１：estar＋gerundio は activity 類事態の連続的・累積的成立（＝evento 性）を明示するための形式である。

しかし，この仮定には問題がある。estar＋ger.という形式は activity 類以外の事態にも適用されるからである。いったいこの事実はどのように考えればよいのか。この点について本稿は，それは activity 類事態における estar＋ger.の機能が他の類の事態にまで応用・拡張されていった結果である，と考えることにした。このことにより，estar＋ger.の本質的機能の仮説は，新たに，次のように書き換えられることになる。

仮説２：estar＋gerundio は当該事態を activity 類化し，その連続的・累積的成立を明示するための形式である。

[1] pretérito のような，いわゆる完了アスペクトを持つとされる時制形式によって表出された事態とそれに対応する estar＋ger.との意味内容の関係は，ここで述べているような関係とは異なる。本文でも述べたように pretérito は当該事態の未成立から成立への変化を示すのがその本質的機能であり，presente や imperfecto のように当該事態を主語の属性として表示することはないからである。

つまり，activity 類以外の事態を対象とした estar＋ger.では，まず，当該事態の概念的 activity 類化が行われ，その事態の持つ時間構造の中で連続的・累積的成立という解釈が可能な部分に真の activity 類事態に見られるのと同様の働き，すなわちその明示化が行われることになるのである。以上のことを公式化すると次のようになる。

仮説 2 の公式化：proposición（Prop.）：[X]
evento（e）：～Prop. & Prop. ＝～[X] & [X]＝〈X〉
estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$

proposición（＝Prop.）は時制・法といった一致要素を排除した当該事態の命題そのものを示し，evento（＝e）は当該事態の未成立から成立への変化，すなわち当該事態の pretérito による表出（＝〈 〉）の意味するところを示している。そして，問題の estar＋ger.の表す当該事態の activity 類化は，この evento（＝e）の連続・累積化の明示ということから，$e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$ という公式で示されている。なお，この当該事態の連続・累積化の中で e と共に表記されている t は連続・累積化される当該事態それぞれの成立時点を示すもので，その導入は，pretérito の示す当該事態の未成立から成立への変化には必ずそれが成就される時点が存在する，という前提に基づいている。

さて，このように公式化された仮説の具体的応用の過程はどのようなものになるのか。また，この仮説は果たしてどれだけ estar＋ger.の実態を説明することができるのか。以下ではこれらの点を検証するために，実際の estar＋ger.文を上の公式に基づき分析していくことにする。

2.1.1.仮説とその応用：atelic 事態の場合

まず，atelic 事態が estar＋ger.文によって表出された場合，上記仮説がどのように応用されるかを見てみよう。

(48)（＝1）Estamos trabajando para que～.（1425：88）[2]
私たちは～のために働いています。
proposición（Prop.）：[(nosotros) trabajar para que～]
evento（e）：～Prop. & Prop.
＝～[(nosotros) trabajar para que～] & [(nosotros) trabajar para que～]
＝〈(nosotros) trabajamos para que～〉
estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$
＝Estamos trabajando para que～.

(48) は有生主語と活動を表わす動詞からなる典型的な activity 事態が estar＋ger.によって表出されたものを，上で見た仮説の公式に従って分析したものである。それによれば，まず，その基本となる命題（proposición）として [(nosotros) trabajar]（私たちが働くこと）が設定される。

[2]括弧内の数字は資料体として用いた Cambio16の号数とページ数を示す。なお，Cambio16以外からの例文はその出典とページ数を示している。

そして当該 estar＋ger.文は，この命題の成立を示す evento，換言すれば，その pretérito による表出の意味内容が連続・累積的に生起することを明示している，ということになる。この解釈は当該 estar＋ger.文の意味するところと矛盾せず妥当性のあるものと思われる。

ところで，第１節では，estar＋ger.によって表出された activity 類事態の中には，動詞自体は telic であるがその主語や補語が不定複数のために事態全体としては activity 類に分類されることになるものが多い，と指摘されていた。そこで，次に，そのような activity 類事態が estar＋ger.によって表出された場合の分析がどのようになるかを見てみたい。

(49)（＝3）Ahora está recibiendo nuevas amenazas de grupos fascistas.（1424：13）
今彼はファシストグループから新たな脅威を受けています。
proposición（Prop.）：［(él) recibir una nueva amenaza de un grupo fascista］
evento（e）：～Prop.&Prop.
＝～［(él) recibir una nueva amenaza de un grupo fascista］&［(él) recibir una nueva amenaza de un grupo fascista］
＝〈(él) recibió una nueva amenaza de un grupo fascista〉
estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$
＝Está recibiendo nuevas amenazas de grupos fascistas.

(49) は，動詞自体は recibir（受け取る）という telic であるが，その補語が裸の複数名詞句のため文全体としては activity に分類された事態が estar＋ger.によって表出された例を，上記仮説の公式に従って分析したものである。まず，この例の基本となる命題は［(él) recibir una nueva amenaza de un grupo fascista］（彼があるファシストグループから新たな脅威を受けること）と設定される。ここで注目すべきは，この命題中の補語（una nueva amenaza de un grupo fascista）が estar＋ger.によって表出された文中のそれ（nuevas amenazas de grupos fascistas）とは異なって単数形になっている点である。この基本命題中の補語の解釈は義務的なものではなく，場合によっては例文と同じ不定複数形を設定することも可能と思われる。しかし，ここで本稿があえて命題中の補語を上記のような不定単数形にしたのは，そうすることにより estar＋ger.文中の nuevas amenazas de grupos fascistas が，基本命題の示す事態の連続・累積的生起の結果表示であることが明示されることになるからである。つまり，本稿は，estar＋ger.文中の裸の複数名詞補語 nuevas amenazas は，［(él) recibir una amenaza de un grupo fascista］という事態の連続・累積的成立という意味解釈を通した結果出現したもの，と理解しているのである。これと同じ分析は，主語が不定複数のため全体として activity 類に分類されている事態の estar＋ger.による表出にも有効である。以下の例を参照されたい。

(50) Últimamente están llegando al pueblo personas extrañas.（Rodríguez Espiñeira 1990：197）
最近不審な人たちがその村に到着している。
proposición（Prop.）：［llegar al pueblo una persona extraña］
evento（e）：～Prop.&Prop.
＝～［llegar al pueblo una persona extraña］&［llegar al pueblo una persona extraña］

＝〈llegó al pueblo una persona extraña〉

estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$

＝Están llegando al pueblo personas extrañas.

(50) は，動詞自体は llegar（到着する）という telic であるが，その主語が personas extrañas（不審な人たち）という裸の複数名詞句であることから文全体としては activity 類に分類されている事態を対象とした estar＋ger.を分析したものである。この estar＋ger.文の基本となる命題は［llegar al pueblo una persona extraña］（その村にある不審な人が到着すること）と設定される。このとき命題中の主語が当該 estar＋ger.文の主語 personas extrañas とは異なり不定単数形になっているのは (49) における補語の扱いと同じ配慮からで，そうすることにより，当該 estar＋ger.文中の裸の複数名詞主語 personas extrañas が［llegar al pueblo una persona extraña］という事態の累積的成立の具体的表示として理解されやすくなるからである。

このように基本命題中の構成要素の複数化によって明示・具現化される当該事態の連続・累積的成立は，同じ atelic の state 類事態が estar＋ger.によって表出される場合にも確認される。

(51)（＝7）Y por otro lado que las restricciones de inmigración que <u>está habiendo</u> hacia ciudadanos de América Latina, les parecen excesivas.（1280：33）

また一方，ラテンアメリカの市民に対して存在している移民制限は彼らには度の過ぎたもののように見えています。

proposición（Prop.）：［haber una restricción de inmigración hacia un ciudadano（ciudadanos）de América Latina］

evento（e）：～Prop.&Prop.

＝～［haber una restricción de inmigración hacia un ciudadano（ciudadanos）de América Latina］&［haber una restricción de inmigración hacia un ciudadano（ciudadanos）de América Latina］

＝〈hubo una restricción de inmigración hacia un ciudadano（ciudadanos）de America Latina〉

estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$

＝Está habiendo restricciones de inmigración hacia ciudadanos de América Latina.

(51) は［haber una restricción de inmigración hacia un ciudadano（ciudadanos）de América Latina］（ラテンアメリカ市民に対する移民制限があること）という state 類事態を基本命題とする事態が estar＋ger.によって表出された場合の分析である。ここでも activity 類事態を対象とした estar＋ger.文の時と同じく，命題中の構成要素（una restricción de inmigración hacia un ciudadanos（ciudadanos）～）と estar＋ger.文とのそれ（restricciones de inmigración hacia ciudadanos）との間に単複の違いが見られるが，結果的には，それがこの例の意味する当該事態の連続・累積的成立という面をより鮮明に示していると思われる[3]。

ここまで見てきた estar＋ger.の分析の仕方，とりわけ，基本命題中の構成要素と estar＋ger.文中に出現する構成要素の間に単数・複数の違いを設けるというやり方は，結局，本稿が estar＋ger.

文の中に出現する複数の構成要素を，同形式が示す当該事態の連続・累積的成立の標示（マーカー）と見なしていることを示しているが，このestar＋ger.文中の複数形の構成要素のあり方が必ずしも一様ではない点は注意しておきたい。

(52)（＝8）El Banco Central Europeo <u>está siendo</u> el blanco de múltiples ataques, sobre todo, alemanes y franceses.（1424：31）

ヨーロッパ中央銀行は多数の攻撃，とりわけドイツとフランスの攻撃の的になっています。

proposición（Prop.）：[el Banco Central Europeo ser el blanco de un ataque～]

evento（e）：～Prop.&Prop.

＝～[el Banco Central Europeo ser el blanco de un ataque] & [el Banco Central Europeo ser el blanco de un ataque]

＝〈el Banco Central Europeo fue el blanco de un ataque〉

estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$

＝El Banco Central Europeo está siendo el blanco de múltiples ataques.

(52)は繋辞動詞serを用いた属性文のestar＋ger.による表出の分析であるが，この例の基本命題中の構成要素とestar＋ger.中に出現するそれとの関係はこれまで見てきた例文の関係とはいささか異なる。(52)のestar＋ger.の文中に出現した複数名詞句にはその基本命題中の名詞句には存在していなかった形容詞（múltiples（多数の））が付加されているからである。しかし，この形容詞の付加は，estar＋ger.の持つ当該事態の連続・累積的成立の明示化という機能の支障になることはなく，múltiplesという形容詞の持つ「多数の」という意味からすれば，むしろ逆に，その有効性の傍証になるとも考えられる。

また，estar＋ger.文の中には，次に見るように，当該事態の中核となる動詞部分の連続・累積的成立は確保されるものの，その補語部分は当該事態が生起するたびに変化することを示していると考えられるものもある。

(53)（＝6）<u>Está queriendo</u> ser de derechas, de izquierdas, de centro, de rey, de jefe de Estado.（1433：23）

彼は右にも組したいし，左にも組したいし，中道にも組したいし，国王，元首にも組したいんです。

proposición（Prop.）：[(él) querer ser de {x}]

evento（e）：～Prop.&Prop.

＝～[(él) querer ser de {x}] & [(él) querer ser de {x}]

＝〈quiso ser de {x}〉

estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$

[3]これまで見てきた例文とは異なり，(51)のestar＋ger.において複数形で表出された構成要素（las restricciones de inmigiración）にはその定性を表示する定冠詞が付加されている。これは当該構成要素がparecer（～のように見える）という定性主語を要求する動詞の主語となっているからで，本稿の主張に対する直接的反証にはならないと思われる。しかしながら，estar＋ger.に出現する構成要素の定性に関しては冠詞自体の機能との関係からもまだ不明な点が多く今後の課題としなければならない。

＝Está queriendo ser de {x}
x＝derechas (e^1/t^1), izquierdas (e^2/t^2), centro (e^3/t^3), rey (e^4/t^4), jefe de Estado (e^5/t^5)

(53) は［(él) querer ser de {x}］という命題を基本とした state 類事態が estar＋ger.によって表出された例である。この分析で注目すべきは，estar＋ger.が表出する当該事態の連続・累積的成立という機能が適用されるのは基本命題の［(él) querer ser de］の部分だけであり，de の補語となる部分はいわば変数(＝{x})として残されるという点である。つまり，その部分は［(él) querer ser de］という事態が成立するたびに確定されはするが，その内容がその都度変化するために，予め特定の要素によって埋めておくことができないのである。この(53)の分析から，estar＋ger.は特に事態の中心となる動詞の示す活動内容 (acción) の累積的生起に焦点をあてた形式であることが分かる。

以上，ここでは，前節で提示された estar＋ger.の本質的機能の仮説が atelic 事態を対象とした estar＋ger.文に対してどのように応用されるかを見た。その結果，提示された仮説，およびその公式は activity 類事態を対象とした estar＋ger.文，state 類事態を対象とした estar＋ger.文のどちらにもうまく適用され問題がないこと，また，atelic 事態を対象とした estar＋ger.文では，その当該事態の連続・累積的成立の明示化という本質的機能が，同形式文中に出現する構成要素の複数性という形で明確に示されることが多いことが明らかになった。

2.1.2.仮説とその応用：telic 事態の場合

次に telic 事態が estar＋ger.の対象となった場合の分析に移るが，その前に，この telic 事態を対象とした estar＋ger.は，その意味内容に従って以下の 2 種類に分けられることを確認しておきたい。

(54) Está viniendo a casa mucho estos días. (Butt & Benjamin 1994：232)
彼はこのごろよく家に来ている。

(55) Marisa estuvo llegando temprano la semana pasada, pero esta semana está llegando tarde otra vez. (Westfall 1995：347)
マリサは先週早く到着していたが，今週は再び遅刻している。

(56) Estoy escribiendo un libro sobre Canarias. (1283：11)
私はカナリアス諸島についての本を書いています。

(57) (＝13) [...] han declarado que la OTAN está perdiendo la guerra. (1434：64)
彼らは NATO は戦争に負けつつあると断言しました。

(54)～(57)はどれも telic 事態が estar＋ger.によって表出されたものだが，(54)，(55)と(56)，(57)の 2 種類に分けられる。この 2 種類の違いはそれぞれの estar＋ger.の意味内容に基づいており，前者の estar＋ger.が当該事態の成立を前提としながらその反復を示しているのに対し，後者のそれは当該事態がまさに未成立から成立への経過途中の状態にあることを示している。telic 事態を対象とした estar＋ger.文に見られるこのような意味的違いを考慮するならば，その分析もそれぞれ異なったものになると推察される。そこで，以下では，各種類ごとの分析を行うことにす

る。

まず，当該事態の成立を前提としながらその反復を示す（54），（55）の分析から見てみよう。このグループは，以下に見られるように，atelic 事態を対象とした estar＋ger.文とまったく同じ分析が可能である。

(54) Está viniendo a casa mucho estos días. (Butt & Benjamin 1994：232)
彼はこのごろよく家に来ている。
proposición (Prop.)： [(él) venir a casa]
evento (e)：～Prop. & Prop.
＝～[(él) venir a casa] & [(él) venir a casa]
＝〈vino a casa〉
estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$
＝Está viniendo a casa.

（54）は，[(él) venir a casa]（彼が家に来ること）を基本命題とした accomplishment 類事態が estar＋ger.によって表出されたものである。その分析は上のとおりであるが，そのあり方は本質的に atelic 事態を対象とした estar＋ger.のそれと変わりない。ただ，estar＋ger.文中に出現している mucho（よく），estos días（このごろ）という副詞句がどちらも分析から排除されている点が問題になるかと思うが，これは，本稿が，それらは estar＋ger.が直接対象とする基本命題の射程外に位置する，と考えていることによる。この accomplishment 類事態を対象とした estar＋ger.の分析は，次の achievement 類事態にも同様に有効である。

(55) [...] esta semana está llegando tarde otra vez. (Westfall 1995：347)
彼女は，今週は再び遅刻している。
proposición (Prop.)：[(ella) llegar tarde]
evento (e)：～Prop. & Prop.
＝～[(ella) llegar tarde] & [(ella) llegar tarde]
＝〈llegó tarde〉
estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$
＝Está llegando tarde.

次に，当該事態の成立を前提としない telic 事態の estar＋ger.文の分析を見てみる。

(56) Estoy escribiendo un libro sobre Canarias. (1283：11)
私はカナリアス諸島についての本を１冊書いています。
proposición (Prop.)：[(yo) escribir]
evento (e)：～Prop. & Prop.
＝～[(yo) escribir] & [(yo) escribir]
＝〈escribí〉
estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$

＝Estoy escribiendo

（56）は［(yo) escribir un libro sobre Canarias］（私がカナリアス諸島についての本を1冊書くこと）という accomplishment 類事態が estar＋ger.によって表出されたものだが，上の分析に従うならば，estar＋ger.の対象となっているのは上記命題のうち［(yo) escribir］の部分だけとなる。これは先に提示した estar＋ger.の機能の定義上，［(yo) escribir un libro sobre Canarias］を基本命題として設定すると，その estar＋ger.による表出は当該事態の反復を示すことになり，実際の estar＋ger.の表出が意味する内容と齟齬を起こすことによる。この分析の仕方は先に見た例文（53）のそれと同じものだが，そこでも指摘したように，本稿は，estar＋ger.がその対象とするのはもっぱら当該事態の中核である動詞部分であり，その動詞の補語となる部分は基本命題中の変数として扱ったりその対象外に置くことが可能である，と考えている。しかしながら，そのような考えをもってしてもうまく分析することができず，仮説の公式に何らかの修正を加えなければならない場合がある。以下のように，achievement 類事態が estar＋ger.によって表出された場合がそれである。

（57）（＝13）[...] han declarado que la OTAN <u>está perdiendo</u> la guerra.（1434：64）
NATO は戦争に負けつつあると断言しました。
proposición1（Prop.1）：［la OTAN perder la guerra］
porposición2（Prop.2）：［Prop.1が成立するまでの準備段階に確認される事態］
evento（e）：～Prop.2 & Prop.2
＝～［Prop.1が成立するまでの準備段階に確認される事態］&
［Prop.1が成立するまでの準備段階に確認される事態］
＝〈Prop.1が成立するまでの準備段階に確認される事態〉
estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$
＝La OTAN está perdiendo la guerra.

（57）は［la OTAN perder la guerra］（NATO が戦争に負けること）が estar＋ger.によって表出された例を分析したものであるが，これには今までの分析とは大きく異なる点がある。それは，estar＋ger.の対象となるべき基本命題が実際に estar＋ger.によって表出された事態の命題とはまったく別物である，という点である。まず，上記の分析によれば，例文（57）が表出されるためには，実際 estar＋ger.によって表出される事態の基本命題（＝Prop.1）の他にもうひとつ別の基本命題（＝Prop.2）が必要となる。この Prop.2と表示された基本命題は Prop.1が成立するにあたりその準備段階で確認される，あるいは，想定される事態であり，その大部分がいわゆる世間知に基づくものである。そして，estar＋ger.はこの Prop.2をその対象として適用されることになるのだが，このとき Prop.1がその対象とならないのは，（56）の場合と同様，そうするとその estar＋ger.による表出は，定義上，まだ成立していないはずの［la OTAN perder la guerra］という事態の連続・累積的成立を意味することになり，実際の estar＋ger.文が意味するところと大きな齟齬をきたすことになるからである。このように Prop.2といった形式的実体を欠くものに依存しなければならない分析は，まさにその一点から妥当性のないものに見えるかもしれない。しかし，上でも述べたように，この Prop.2がいわゆる世間知に基づくもので，任意に設定される

ものでないという点は決して看過すべきではない。これを換言すれば，一般的に認知された準備段階を持たない achievement 類事態の estar＋ger.による表出は極めて難しいということになるのだが，それは，以下の例が示すように，実際に検証されることだからである。

(58) *Juan está dando un grito. (Gómez Torrego 1988：143)
フアンはひとつ大声をあげつつある。

(59) *Estoy encontrando la cartera. (Ibid.:146)
私は財布を見つけつつある。

(58)，(59) ともに (57) と同じく achievement 類事態だが，その estar＋ger.による表出は非文となる[4]。本稿の解釈によれば，この二文が (57) と異なり非文となるのは，どちらもそれが成立するまでの準備段階における事態というものを欠く，すなわち，その準備段階における事態というものが一般的知識として認識されていないことによると思われる[5]。

以上，telic 事態を対象とした estar＋ger.文が前節で提示した仮説に基づきどのように分析されるかを見た。その結果，telic 事態を対象とした estar＋ger.文は，atelic 事態を対象とした estar＋ger.文とまったく同じ要領で分析される場合とそうでない場合があること，atelic 事態を対象とした estar＋ger.文と異なる分析が行われる際の特徴としては，① accomplishment 類事態を対象とした estar＋ger.文の基本命題は補語を除いた動詞部分だけになること，② achievement 類事態を対象とした estar＋ger.文の基本命題は実際に estar＋ger.によって表出される事態とは別の当該事態が成立するまでの準備段階で認められる事態のそれになること，が明らかになった。次節では，本稿が提起する estar＋ger.の本質的機能の仮説に依拠することにより説明されることになる諸現象を扱い，その有効性のさらなる検証を行うことにする。

2.2.仮説によって説明される estar＋ger.の諸現象

2.2.1.estar＋ger.によって表出されない事例の解釈

よく知られているように，estar＋ger.は必ずしもすべての事態に適用可能なわけではない。ここではそのように estar＋ger.によって表出されない事例を取り上げ，その理由を本稿が提起した仮説との関連から考えていきたい。まず，以下の例を参照されたい。

(60) *Ignacio está siendo corpulento. (Rodríguez Espiñeira 1990：187)
イグナシオは太っている。

(61) Está siendo muy blanda con su hija. (Ibid.)
彼女は娘にとても甘い。

---

[4]もちろん (55) のように当該事態の反復的成立を明示するような副詞句が付加されれば (58)，(59) ともに文法的になる可能性はある。しかし，ここでは，そのような場合は考慮に入れていない。また，これらの二文が非常に特殊な状況，文脈に置かれた場合（例えば，超スローモーションのビデオの描写といった状況など）にも同様にそれらは文法的と解釈される可能性がある。しかし，この場合も，そのような特殊な状況を設定しなければならないということ自体が当該事態には一般的に認知された準備段階の事態が欠けていることを示しているため，本稿の主張の反例にはならないと考える。

[5] achievement 類事態の estar＋ger.による表出に見られる制約については，Westfall も本稿と同様の解釈をしている。Cf.Westfall (1995),p.315.

(60)，(61) ともに繋辞動詞 ser を用いた属性文であるが，その estar＋ger.による表出に関しては文法性の違いがある。Rodríguez Espiñeira（1990：188）によれば，いわゆる state 類には un estado característico（特質的状態）を表わすもの（＝60）と un estado contingente/temporal（偶発・一時的状態）を表わすもの（＝61）の 2 種類があり，後者は変化する可能性があるという点において situaciones dinámicas（動的事態）と共通性があるため，それらと同じく estar＋ger. による表出が可能になる，と述べている。そして，さらに，(61) においては当該事態の state 類から動的事態への再範疇化が起こっている，とも述べている。しかし，少なくとも本稿の解釈では，(60)，(61) の両方とも state 類事態をその基本命題とするという点において変わりはなく，estar＋ger.による表出が可能になった（61）だけを動的事態へ再範疇化されたものと見なす必要はない，と考える。一方，Rodríguez Espiñeira のいう変化性の有無に基づく state 類事態の 2 区分は，以下に述べる本稿の考えといくぶん共通するところがあるといえるかもしれない。

上記二文の estar＋ger.による表出に関しての文法性の違いを本稿の仮説の公式を用いて分析してみると，次のようになる。

(60) *Ignacio <u>está siendo</u> corpulento.
proposición（Prop.）：[Ignacio ser corpulento]
evento（e）：～Prop. & Prop.
＝～[Ignacio ser corpulento] & [Ignacio ser corpulento]
＝〈?? Ignacio fue corpulento〉
estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$
＝*Ignacio está siendo corpulento.

(61) <u>Está siendo</u> blanda con su hija.
proposición（Prop.）：[(ella) ser blanda con su hija]
evento（e）：～Prop. & Prop.
＝～[(ella) ser blanda con su hija] & [(ella) ser blanda con su hija]
＝〈(ella) fue blanda con su hija〉
estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots\ e^n/t^n$
＝Está siendo blanda con su hija.

上の分析によれば，(60)，(61) の文法性の違いはそれぞれの evento 性の違いにあると結論づけられる。つまり，(60) が estar＋ger.によって表出されないのは，その基本命題である [Ignacio ser corpulento]（イグナシオが太っていること）自体が pretérito による表出の困難な evento 性を欠いたものだからで，その結果，当該事態の連続・累積的成立をその機能とする estar＋ger.も適用されないことになるのである。換言すれば，(60) が estar＋ger.によって表出されないのは，その前提となる当該事態の未成立から成立への変化性そのものが確保されていないからということになる[6]。このことは，次の例が示すように，pretérito による表出が不可能な事態は総じて estar＋ger.による表出も不可能である，という事実によって確認される。

[6] pretérito による表出の可否によって示される当該事態の evento 性の実体については，山村（1998a）を参照されたい。

(62) *Ya están siendo las tres. (Ibid.:198)
もう3時になっている。

(62)' *Ya fueron las tres.
もう3時だった。

(63) *Está teniendo los ojos azules. (Ibid.:187)
彼は青い目を持っている。

(63)'??Tuvo los ojos azules.
彼は青い目を持った。

(62) は時間表現が estar+ger.によって表出された場合，(63) はいわゆる人の身体的特徴を表わす事態が estar+ger.によって表出された場合であるが，どちらも非文となっている。ここで注目すべきは，先に見た (60) と同様に，これら二文の基本命題は pretérito による表出も不可能かきわめて難しいという点である。この pretérito による表出の不可能性と estar+ger.による表出の不可能性の相関関係は，ある事態が estar+ger.によって表出されるときその事態は必ず pretérito による表出も可能であることを示したもので，本稿が提示する estar+ger.の機能に関する仮説，つまり，同形式は当該事態の連続・累積的成立を明示するという仮説の妥当性を強く支持するものと思われる。しかしながら，逆に，pretérito による表出の可能な事態のすべてが estar+ger.による表出も可能となるわけではない点には注意しておかねばならない。すなわち，次の例が示すように，スペイン語の事態の中には，pretérito による表出は可能でも estar+ger.による表出が不可能というものがあるのである。

(64) *Está estando en casa. (Butt & Benjamin 1994 : 234)
彼は家にいる。

(64)' Estuvo en casa.
彼は家にいた。

(65) *Está estando cansado.
彼は疲れている。

(65)' Estuvo cansado.
彼は疲れていた。

(66) (=59) *Estoy encontrando la cartera.
私は財布を見つけつつある。

(66)' Encontré la cartera.
私は財布を見つけた。

(64)，(65) は状態を表わす繋辞動詞 estar を用いた事態が estar+ger.によって表出された例だが，どちらも非文となる。しかし，(64)'，(65)'に明らかなように，これらの pretérito による表出は何の問題もなく，可能である。一方，(66) は，achievement 類事態の estar+ger.による表出を分析した際に扱った例であるが，これも pretérito による表出には何の問題もない。このように pretérito による表出が可能なのにも拘わらず，その estar+ger.による表出が不可能な例について，本稿は今のところ次のように考えている。

まず，(64)，(65)のような場合は，estar＋ger.によって表出されるべき事態，特に，その中核である動詞の語彙構造の中に estar＋ger.の機能と相容れない部分があるのではないかと考える。その理由は，estar を用いた事態は estar＋ger.による表出は不可能でも，それ以外の迂言形式，例えば seguir＋ger.といった迂言形式による表出は可能だという事実があるからである[7]。次に，(66)およびそれに類した例の非文性については，先にも指摘したように，estar＋ger.による表出の契機となるべき事態が一般的に認知されていないことに原因があると考えられる。このような解釈の妥当性は，(66) のような例も，estar＋ger.の機能と齟齬をきたさないような特殊な状況・文脈を設定すれば，他の事態と同様に(例えば57のように)，同形式による表出が可能になるということによって示されると思う[8]。

以上，本節では，estar＋ger.によって表出されない例が本稿の仮説によって簡単に説明されること，すなわち，estar＋ger.の本質的機能を当該事態の連続・累積的成立の表出とするならば，その機能の前提となる evento 性を欠いた事態は当然同形式による表出が困難あるいは不可能になることを見た。

2.2.2. estar＋ger.によって表出された習慣文の解釈

次に，本稿が提示した仮説と当該事態の習慣性を表出した estar＋ger.文との関係を見てみる。第1節でも指摘たように，先行研究の中には，estar＋ger.が習慣的事態を表出することに否定的な見解を述べているものがある。以下の Westfall(1995：321)はその代表的なものである。

"Habituals, a type of derived Stative, cannot be expressed by the progressive. For this reason, the progressive is incompatible with frequency adverbials."

Westfall の理解によれば，習慣文は state 類事態の派生であるため estar＋ger.によって表出されない，ということになる。この見解は state 類事態が estar＋ger.によって表出されないということを前提としたものであるが，第1節で見たように，state 類事態が estar＋ger.によって表出されることは珍しいことではない。従って，Westfall の見解はその前提からして問題を抱えたものということになる。さらに，Westfall はこの誤った前提を基に estar＋ger.は頻度を示す副詞と共起できないと述べているが，これも estar＋ger.の実態を正しく捉えたものでないことはすでに指摘した[9]。このような先行研究の問題点を踏まえながら，本稿が提示するその本質的機能の仮説をもとに習慣的事態を表わす estar＋ger.文を新たに分析すると，次のようになる。

(67) (＝40) Y a mí me gustaría que no estemos *todos los días* buscando una noticia nueva en la negociación de la tregua. (1425：50)

私はできれば，私たちが毎日停戦交渉の新しいニュースを探しているなんてことにならなきゃいいと思っています。

proposición(Prop.): [(nosotros) buscar una noticia nueva en la negociación de la

[7]しかし，この estar を用いた事態と estar＋ger.との関係には不明な点が多いというのも事実で，その点からすれば，この考えにもいまだ検討する余地が多々残されているといわざるをえない。
[8]注4を参照されたい。
[9]前稿（山村（2000)），p.156の（40)，(41)，(42）の例を参照のこと。

tregua]
evento(e): ～Prop. & Prop.
=～[(nosotros) buscar una noticia nueva～] &[(nosotros) buscar una noticia nueva～]
= 〈buscamos una noticia nueva en la negociación de la tregua〉
estar+ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+...e^n/t^n$
=Estamos buscando una noticia nueva en la negociación de la tregua.
$t^1+t^2+t^3+...t^n$=todos los días

(67)の分析にはこれまでの分析に見られなかった点，言いかえれば，習慣的事態を表出するestar+ger.文の特徴と考えられる点がいくつかあるので，それを指摘しておきたい[10]。

まず，(67)の基本命題中の補語（una noticia nueva ひとつの新しいニュース）がestar+ger.による表出の中で複数形になっていない点である。これまでは(49)，(50)の例で見たように，基本命題の中で単数形だった構成要素はestar+ger.文の中で複数形になり，それが同形式の持つ当該事態の連続・累積的成立の明示という機能のマーカーと理解されてきた。しかし，(67)ではその複数形で表出されるべき構成要素が基本命題中と同じく単数形のまま表出されている。これは，(67)のestar+ger.が，基本命題の単なる連続・累積的成立を示しているのではなく，その正確な反復的成立を表わすと解釈されているからである。ここでいう当該事態の正確な反復的成立とは，次のようなものである。

el día $1/e^1$ 〈buscamos una noticia nueva en la negociación de la tregua〉
el día $2/e^2$ 〈buscamos una noticia nueva en la negociación de la tregua〉
el día $3/e^3$ 〈buscamos una noticia nueva en la negociación de la tregua〉
⋮
el día n/e^n 〈buscamos una noticia nueva en la negociación de la tregua〉

上の図は，(67)の基本命題の示す事態の成立が各1日と正確に対応していることを示している。つまり，本稿は，(67)のestar+ger.文に出現する構成要素が基本命題中の構成要素を忠実に反映する形で表出されることになったのは当該事態の成立とその成立時との関係がこのように明確な対応関係を示しているから，と考えるのである。このような基本命題の成立とその成立時との対応関係の解釈にあたっては，todos los días(毎日)という副詞句の存在が大きく影響している。当該事態の成立時の集積を示す$t^1+t^2+t^3+...t^n$がtodos los díasという副詞句によって表出されるためには，予め成立時のそれぞれが各1日と理解されている必要があり，そのような理解を通してこそ，基本命題の成立とその成立時の一対一の対応関係は確定されるからである。

ところで，上の解釈によれば，(67)の副詞句todos los díasは基本命題そのものを修飾するのではなくestar+ger.によって表出される部分全体を修飾していることになるが，そのような見方は，次のようなsiempre(いつも)と共起したestar+ger.文にも有効と思われる。

[10] (67)は否定文であるが，その分析は否定辞noを排除した形で行われている。これは，本稿が，否定辞の対象となっているのは基本命題の内容ではなくestar+ger.の表出内容であると解釈していることによる。しかし，estar+ger.による表出と否定との関係についてはまだ検討すべき点が多い。

(68)（＝42）El cómico siempre está pasando exámenes.（1261：73）

コメディアンはいつも試験にパスしています。

proposición(Prop.): [el cómico pasar un examen]

evento(e):～Prop. & Prop.

＝～[el cómico pasar un examen] & [el comico pasar un examen]

＝ ⟨el cómico pasó un exámen⟩

estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+...e^n/t^n$

＝El cómico está pasando exámenes.

$t^1+t^2+t^3+...t^n=$ siempre

(68)の基本命題は［el cómico pasar un examen］（コメディアンが試験にパスすること）であり，その estar＋ger.による表出はこの命題の連続・累積的成立を示している。そして，この estar＋ger.文中に出現した構成要素はこれまで見てきた通常の estar＋ger.文と同じく複数形になっている。従って，(68)が習慣的事態を表出しているという解釈はもっぱら siempre という副詞の存在によっていると考えられるが，上の分析でも分かるように，この副詞 siempre は当該事態の成立時の集積である $t^1+t^2+t^3+...t^n$を再解釈したもので，結果的には，(67)の todos los días 同様，estar＋ger.全体を修飾していると考えられる。

次に，習慣的解釈を導く副詞句が出現していないにも拘わらず，そのような解釈が可能になっている estar＋ger.文の分析をしてみる。

(69)（＝31）Estamos trabajando 24 horas al día.（1433：56）

私たちは１日24時間働いています。

proposición(Prop.): [(nosotros) trabajar 24 horas al día]

evento(e): ～Prop. & Prop.

＝～[(nosotros) trabajar 24 horas al día] & [(nosotros) trabajar 24 horas al día]

＝ ⟨trabajamos 24 horas al día⟩

estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+...e^n/t^n$

＝ Estamos trabajando 24 horas al día.

(69)は習慣的解釈を可能にする頻度を示す副詞句を欠いているが，習慣的事態を表出していると理解される。それが可能なのは，estar＋ger.が対象とする基本命題［(nosotros) trabajar 24 horas al día］（私たちが1日に24時間働くこと）の意味内容自体が習慣的事態と解釈されるからであろう。(69)から24 horas al día（１日24時間）という副詞句を取り除いた Estamos trabajando.（私たちは働いている）という文は，必ずしも習慣的事態を示さないからである。このように，estar＋ger.文の中には，それによって表出される基本命題の意味内容から必然的に習慣的事態を表わすと理解されるものも少なくない。

以上，本節では estar＋ger.によって表出された習慣文が本稿の提示した仮説でどのように分析されるかを見てきたが，最後に，このような estar＋ger. によって表出された習慣文と動詞単純形によって表出された習慣文との違いについて触れておきたい。

(69) (=31) Estamos trabajando 24 horas al día. (1433 : 56)
私たちは1日24時間働いています。

(69)' Trabajamos 24 horas al día.
私たちは1日24時間働きます。

(69)'は(69)のestar+ger.を対応する単純形に置き換えたものであるが，その分析は次のようになる。

(69)' Trabajamos 24 horas al día.
proposición(Prop.): [(nosotros) trabajar 24 horas al día]
estado: oV
=[trabajamos 24 horas al día]
OoV =O(発話時) [trabajamos 24 horas al día]
=Trabajamos 24 horas al día.

上は(69)'を山村(1997)の公式に従って分析したものである。この分析中estadoで示されるのは，presente, imperfectoといった時制形式が表出する意味内容，つまり，当該事態が既定の基準時と同時関係にある，ということである。また，OoVはその同時関係が発話時を基準時としたものであることを示している。従って，(69)'全体では，基本命題［(nosotros) trabajar 24 horas al día］の表わす事態が発話時と同時関係にあることを示すことになるが，ここで注目すべきは，(69)'の基本命題は上で見た(69)のそれと同じものであることから，結果的に，(69)'も(69)と同じく習慣文として解釈されるという点である。しかし，実際の(69)と(69)'の意味するところには，微妙な違いがある。その違いはいったいどのように説明されるのか。本稿は，(69)と(69)'のもっとも大きな違いは，前者が習慣的事態を示す基本命題［(nosotros)trabajar 24 horas al día］のevento性を明示するのに対し，後者はそうではない点にあると考える。(69)はestar+ger.による表出なので，その基本命題の内容が何であれ，まず，当該事態の連続・累積的成立が明示されることになるが，その前提として，常に当該事態の未成立から成立への変化，換言すれば，そのevento性が必要とされるのに対し，presenteの単純形で表出された(69)'にはそのような必要性がまったくないからである。このようなestar+ger.と単純形の間に見られるevento性の有無は，しばしば指摘される両形式間のdinamismoの有無の差にうまく対応したものと考えられる。

2.2.3. pretéritoによって表出されたestar+ger.に見られる制約の解釈

本稿の提示するestar+ger.の本質的機能についての仮説は，第1節で観察された同形式の制約もうまく説明することができる。ここでは，そのうち，特にpretéritoによって表出されたestar+ger.におけるmomentary advevrbialsとの共起の制約を見ていくことにする。

(70) (=25) Estuve haciendo monólogos en bares *más de diez años*. (1437 : 82)
私は10年以上バルでひとり芝居をやっていました。

(71) (=36) *Anteayer* estuve anotando algo no vinculado con la política.(1264 : 24)
おととい私は何か政治にかかわりのない事をメモしていました。

(72)（＝38）*_Al mediodía_ estuvieron comiendo.（Westfall 1995：328）
正午に彼らは食事中だった。

第１節の1.3.1.では，上記の例に見られるように，estar＋ger.の pretérito による表出はある程度の intervalo を伴った時の副詞句とは共起するが，そのような intervalo を欠いた，いわゆる momentary adverbials とは共起することができないことを見た。今，(72)の例を取り上げ，このような現象が起こる原因を本稿が提示する estar＋ger.の機能の仮説から考察してみると，次のようになる。

(72) *Al mediodía estuvieron comiendo.
proposición(Prop.): [(ellos) comer]
evento(e): ～Prop. & Prop.
＝～[(ellos) comer] & [(ellos) comer]
＝ 〈comieron〉

estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+...e^n/t^n$
＝(ellos) estar comiendo

PRET. [estar＋ger.]＝ PRET. $(e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+...e^n/t^n)$
Adv.T.＋PRET.[estar＋ger.]＝Adv.T.＋PRET.$(e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+...e^n/t^n)$

上記の分析の後半ではこれまでの分析とは異なり，estar＋ger.の部分が時制・法といった一致要素を欠いた形で表出されている。それは，同形式とここで問題としている pretérito による表出との関連をより明確に示すためであるが，この記述のあり方から分かるように，本稿はある時制形式によって表出された estar＋ger.の実現形はすべて，一致要素を持たない estar＋ger.の形をした命題に当該時制がオペレータとして働いた結果と考えている[11]。このような考えに基づき pretérito によって表出された estar＋ger.を分析すると，それは当該事態の連続・累積的成立を明示する estar＋ger.の命題に pretérito という時制オペレータが働いた結果の実現形ということになる。

さて，問題はこの pretérito によって表出された実現形と momentary adverbials がなぜ共起できないかという点にあるのだが，本稿の提示する estar＋ger.の機能に関する仮説という観点から見ると，それは pretérito が対象とする estar＋ger.の命題の時間構造と当該副詞句の時間構造が相反するためと考えられる。

これまで繰り返し見てきたように estar＋ger.は当該事態の連続・累積的成立を示すが，このとき同時にその事態の成立時も連続・累積されていく点に注目してもらいたい。上記分析では，$e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+...e^n/t^n$のうち，$t^1+t^2+t^3+...t^n$の示している部分がそれにあたる。この成立時の連続・累積は，必ず一定の intervalo を示すことになるが，それは，結局，estar＋ger.をその命

[11]従って，本稿は，pretérito によって表出された estar＋ger.を pretérito によって表出された繋辞動詞 estar と現在分詞の組み合わせと考えることはせず，それはあくまで繋辞動詞 estar と現在分詞からなる命題が pretérito によって表出されたものと見なす。

題とする事態自身必ず一定の intervalo を持つ，ということに等しい。第1節で見たように，telic 事態の pretérito の estar＋ger.による表出が単純形によって表出された場合とは異なり期間副詞句と共起したのも，この estar＋ger.の時間的特質によるといってよいだろう。一方，pretérito と共起する時の副詞句については，山村(1997,1998b)でも指摘されたように，常に当該事態の成立時を表示することが分かっている。以上のことを踏まえながら，再度 pretérito によって表出された estar＋ger.と momentary adverbials が共起した場合を考えてみると，両者がまったく相容れない関係にあることが分かる。estar＋ger.の pretérito による表出は一定の intervalo を持った事態の成立を示すのに対し，それと共起する momentary adverbials は，結果的に，その事態を構成する累積的諸事態のうちのたったひとつの成立時しか示さないからである。このことを図示すると次のようになる。

a) $\underbrace{e^1/t^1+e^2/t^2+{}^3/t^3+...e^n/t^n}_{\text{Adv.T.}}$

b) $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+...e^n/t^n$
↑
Adv. T.

pretérito によって表出される estar＋ger.と共起しその成立時を示すことになる時の副詞句は，図 a)が示すように，estar＋ger.の表わす一定の intervalo を包含したものでなければならない。そのような intervalo を欠いた時の副詞句が pretérito の estar＋ger.と共起すると，図 b)が示すように，それは，結果的に，estar＋ger.を構成する諸事態のひとつ(例えば e^2)だけの成立時を示すことになり，非文となってしまうのである[12]。以上のことから，pretérito によって表出された estar＋ger.が一定の intervalo を持った時の副詞句としか共起できないのは，結局，estar＋ger.自身が一定の intervalo を持った事態を指示しているためである，と結論づけられる。

2.2.4.仮説と「継続説」，「現前化説」との関係

最後に，本稿が提示した estar＋ger.の機能の仮説と先行研究が提唱してきた「継続説」，「現前化説」との関係について述べておきたい。結論からいえば，これまで主張されてきた「継続説」，「現前化説」のどちらも本稿の提示する仮説によって説明可能ということができる。

まず，「継続説」から見てみよう。これまで，先行研究の主張してきた estar＋ger.の継続性が何を意味するのかが明確に定義されたことは少なかったように思うが，例えば Westfall(1995：298-300)は，それは pretérito によって表出された estar＋ger.に明らかだ，と述べている。おそらくこれは，pretérito の estar＋ger.が一定の intervalo を持った時の副詞句としか共起できないとい

[12]ただし，次の例のように momentary adverbials が estar＋ger.の対象となる基本命題の中に入っている場合は，非文にはならない。Ha estado saliendo con Ana a las cinco.（彼はアナと5時にデートしてきた。(Rallides 1971：34)） この例文に出現する a las cinco（5時に）という副詞句は［(él) salir con Ana a las cinco］（彼がアナと5時にデートすること)というように，始めから estar＋ger.の対象となる基本命題の中に組み込まれた形で分析される。その結果，この a las cinco は，estar＋ger.を構成する累積的諸事態の特定のひとつの成立時を示すことはなくなり，非文にはならない。

う事実を指したものと思われるが，だとすれば，先行研究のいう estar＋ger.の継続性というのは，上で見た petérito によって表出された estar＋ger.と momentary adverbials との非共起性と同じ要領で説明が可能ということになる。すなわち，先行研究のいう estar＋ger.の継続性とは，実は，本稿が提示した仮説「estar＋ger.は当該事態の連続・累積的成立の明示を示す」から自然に導かれる結果，「従って，estar＋ger.をその命題とする事態は必ず一定の intervalo を持つ」ということを別の表現で言い換えていたものに他ならないのである。このような見方が正しいとするならば，estar＋ger.の表出する当該事態の継続性は，state 類事態が presente や imperfecto によって表出された場合に示す静的な継続性とはまったく別物ということになる。なぜなら，何度も述べてきたように，estar＋ger.による表出は，その基本において当該事態の evento 性を前提としたものだからである。

次に，estar＋ger.は当該事態が実際に進行中であることを示すという「現前化説」についてだが，これも「継続説」と同様に，本稿の仮説を通して説明することができると思われる。ただし，ここで重要になってくるのは，「継続説」で問題になった事態の連続・累積的成立に伴う成立時(t)の累積ではなく，言語外現実をどう捉えるかという話者の言語表出過程そのものといえる。というのも，同じ習慣的事態が動詞単純形と estar＋ger.の両方によって表出可能という事実からも明らかなように，ある言語外現実を estar＋ger.という形式を用いて表出するということは，話者がそれをある事態の連続・累積的成立，すなわち静的な状態とは異なる，動的特質に満ちた状況として概念化していることのまさに証左になるからである。

3. まとめと課題

以上，本稿では山村(2000)で実施された estar＋ger.の記述結果に基づきながら，同形式の本質的機能に関する考察が行われた。その結果，まず，estar＋ger.の本質的機能は，当該事態を概念的に activity 類化し，その連続的・累積的成立を明示することにある，という仮説が提示され，それは次のように公式化された。

proposición(Prop.): [X]
evento(e): ～Prop. & Prop.
　　＝～[X] & [X]
　　＝〈X〉(当該事態の pretérito による表出)
estar＋ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+...e^n/t^n$

Tp. [estar＋ger.]

この公式によれば，estar＋ger.はある evento(e)，すなわち，具体的には pretérito による表出が示す当該事態の未成立から成立への変化を前提とし，その連続的・累積的成立を明示するということになる。また，この分析によれば，ある時制形式によって表わされた estar＋ger.の実現形

[13]この考え方は，本稿では，pretérito によって表出された estar＋ger.とそれと共起する時の副詞句との関係にしか応用されなかった。しかし，それは第1節で見た他の時制形式によって表出された estar＋ger.と時の副詞句の関係もうまく説明できると思われる。

は，上記の機能を持ったestar＋ger.に当該時制がオペレータとして適用された結果と考えられていることも分かる[13]。

次に，以上の仮説の有効性を検証するために，それが実際のestar＋ger.文に対してどのように応用されるかを見たが，その結果，本稿が提示した仮説は前稿で記述されたestar＋ger.の実態を無理なく説明することができることが明らかになった。また，本稿の仮説を用いれば，estar＋ger.による表出が非文となる例，習慣的事態がestar＋ger.によって表出された例，pretéritoによって表出されたestar＋ger.に見られる制約，が整合性のある形でうまく説明できることも示された。さらに，本稿の「estar＋ger.は当該事態の連続的・累積的成立を示す」という説は，これまで主張されてきた同形式の「継続性」および「現前性」の両方を統一的に説明できることも示された。

以上のことにより，本稿が提示したestar＋ger.の本質的機能に関する仮説はある程度の妥当性を持つことが示されたと思う。しかし，それはまだ万全なものとはいえない。次にあげるような解決すべき問題が残されているからである。

問題の第一は，estar＋ger.が表出する当該事態の「一時性」である。前稿の最初にも述べたように，estar＋ger.には大きく分けて「進行中の出来事」，「一時的な出来事」，「延長された出来事」，「反復された出来事」という4つの用法があるといわれている[14]。このうち当該事態が進行中であること，延長されたものであること，反復されたものであること，を示す3つの用法は本稿が提示した仮説を応用することによってうまく説明することができると思われるが，当該事態が一時的なものであることを示す用法，つまり，当該事態が特定の時間内に限られたものであることを示すestar＋ger.の用法を本稿の仮説によって直接説明することは難しいようにみえる。このestar＋ger.が持つ「一時性」という特徴を本稿が提示した仮説との関連において説明するためには，どのような道具を用いればよいのか，また，そのような道具を使った際の具体的操作はどのようなものになるのか。今のところ，本稿は，estar＋ger.の「一時性」は同形式のgerundioの部分が示す当該事態のevento性と繋辞動詞estarが持つstage-level的意味特徴との相互作用から生じるものと考えているが，そのメカニズムはまだよく分かっていない。

問題の第二は，繋辞動詞estarを用いた事態はなぜestar＋ger.によって表出されないかということである。この問題については本稿でも若干触れたが，estarの意味構造とestar＋ger.の機能との間に何か相容れない部分があるのではないかと推測される。しかし，これもまた憶測にすぎず，確実なことは何も分かっていない。

本稿が提示したestar＋ger.の仮説の有効性をより確固としたものにするためには，これらの問題の解決が不可欠である。

参 考 文 献[15]

Butt, J. & Benjamin, C. (1994²): *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, London: Edward Arnold.

Gómez Torrego, L.(1988): *Perífrasis verbales*, Madrid: Arco/Libros, S.A.

Rallides, C.(1971): *The Tense Aspect System of the Spanish Verb as Used in Cultivated Bogotá*

[14] Cf.山村（2000），p.141.

[15]以下では特に本稿（下）が参考にした文献のみをあげてある。

Spanish, The Hague: Mouton.

Rodríguez Espiñeira, Mª. J. (1990): "Clases de 'Aktionsart' y predicaciones habituales en español", *Verba* 17, pp.171-210.

Solé, Y & Solé, C. A. (1977): *Modern Spanish Syntax: A Study in Contrast*, Lexington: D.C. Heath and Company.

Westfall, R.H.(1995): *Simple and Progressive Forms of the Spanish Past Tense System: A Semantic and Pragmatic Study in Viewpoint Contrast*, Ph. D. dissertation, Univ. of Texas at Austin, Ann Arbor: UMI.

山村ひろみ(1997):「ser コピュラ文の pretérito による表出について」『独仏文学研究』第47号, pp. 81-102.

_____(1998a):「pretérito による表出のための条件—無生主語文の場合—」『言語文化論究』No. 9, pp.185-207.

_____(1998b):「Smith(1991)のアスペクト理論とスペイン語の pretérito」『独仏文学研究』第48号, pp.135-150.

_____(1999):「スペイン語における事態の分類について」*HISPANICA* 43, pp.41-52.

_____(2000):「estar＋gerundio の記述と考察（上)」『言語文化論究』No.11, pp.141-163.

Descripción e interpretación de la frase "estar+gerundio"(II)

Hiromi YAMAMURA

Este trabajo es la segunda parte del artículo titulado "Descripción e interpretación de la frase "estar+gerundio", donde, basándose en los datos recogidos en el artículo anterior, se propone una hipótesis sobre la función básica de la frase "estar+gerundio" que pueda explicar globalmente todos los fenómenos que presenta dicha frase.

Hipótesis: la frase "estar+gerundio" es una forma perifrástica para indicar claramente que la situación en cuestión ocurre sucesiva o acumulativamente.

Y esta hipótesis se formula como sigue:

proposición(Prop.): [X]
evento(e): ~Prop. & Prop.
= ~[X] & [X]
= 〈X〉 (equivalente a la expresión en el pretérito simple)
estar+gerundio: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+...e^n/t^n$

La "proposición" (=Prop.) se compone de una oración (=[X]) que no tiene tiempo ni modo. El "evento"(=e) significa una realización del cambio de no-cumplimiento en el cumplimiento de la proposición en cuestión. Es equivalente a lo que indica la expresión en el pretérito simple de dicha proposición. Como la frase "estar+gerundio" indica una serie o acumulación del evento, resulta que una oración expresada por esta perífrasis indica que la situación en cuestión tiene lugar sucesiva y acumulativamente.

Esta hipótesis tiene validez en el hecho de que explique muy fácil y razonablemente algunas particularidades de la frase "estar+gerundio", como la existencia de las proposiciones que nunca se pueden expresar en la frase "estar+gerundio", la posibilidad de que la frase "estar+gerundio" exprese una situación habitual y la restricción de adverbios temporales que pueden aparecer con la frase "estar+gerundio". Y la hipótesis presentada arriba puede explicar también la pertinencia de las dos particularidades muy conocidas de la frase "estar+gerundio", o sea, su carácter 'durativo' y 'actualizador(dinámico)', desde un punto de vista común y más global.